

氏名（本籍）	ジョン ヒギョン 丁 憲 均（大韓民国）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第115号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位論文等題目	作品 李朝の造形性を生かす現代的白磁制作研究 論文 朝鮮時代の陶磁器から現代韓国が生かすべき美的造形意識
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 島田文雄
（論文第1副査）	” ” （ ” ） 佐藤道信
（作品第1副査）	” ” （ ” ） 豊福誠
（副査）	” ” （ ” ） 戸津圭之介
（ ” ）	” ” （ ” ） 竹内順一
（ ” ）	” ” （ ” ） 宮田亮平

（論文内容の要旨）

韓国の近代化というのは、あらゆる面で、西洋文明の輸入にはじまる急速な洋風化の時代でもあった。陶磁器をはじめ、生活のさまざまな造形物のほとんどが、産業化のなかで機能主義的形態のみならず、その美的な内容や感覚にまで洋風化が及んだ。

しかし、いくら洋風化あるいはモダンな物に変わったとはいえ、それが人々の心にまで、必ずしも美的に自然な感覚で受け入れられたわけではないだろう。

特に、陶磁器の伝統が長かった韓国では、西欧的造形感覚との融合は容易な事ではない。長い間、韓国人の中に形成された造形意識や習慣などが、いまでも根強く潜んでいるからである。

その反面、昔のものをそのまま受け継ぐ、いわば伝統陶磁というものも、時代や感覚などが変わった今の韓国人にとっては、感動や楽しさを与える事がなかなかできないといえる。

現在、韓国では、経済的成長と共に、自国の文化に対する関心がどの時期よりも高まっている中で、特に陶磁器は韓国の美術を代表するものとして言われている。また、最近になって、数多くの陶芸家たちが登場し、活発な活動が行われてきた。しかし、その作品活動のほとんどは昔のものを適当にコピーしたものか、あるいは洋風のモダンな物、ひいてはいわば彫刻的な前衛陶芸などが主流で、伝統から現代につながる個性的制作はまだあまりみられない。

これについては、韓国の伝統と洋風化が入り乱れている状況でのいろいろな原因があると思うが、何よりも自らの美意識や美的価値などがしっかりとおさえられていないことに起因すると考える。

その中で筆者は、日ごろから朝鮮時代の陶磁器に何ともいえない魅力を感じてきた。それは古いものから感じる新鮮さであり、味の深い感じであった。また、筆者自身の内部のどこかに流れているような不思議な感覚でもあった。

そこから気づいたのは、伝統的感覚についての理解や、それを現代的感覚とのバランスを取らずに既存の西欧の美術（Fine arts）の感覚に対応しようとしても、自らをなかなかうまく位置づけられないだろうという点であった。特に、作品制作にあたっては、韓国的な美意識や歴史的な背景について自分なりに認識した上で、ものへの感動や研究に基づき、自分の制作にそれを生かさなければならぬと考える。それは、筆者にとって単なる造形的回帰ではなく、韓国陶磁の伝統の流れから現代につなぐ、ごく自然な関心事でもあった。

筆者は韓国の現代陶芸における根本的な問題を、大きく二つの事にあると考える。一つは、悩みや著しい造形的模索が行われなかったこと、つまり伝統陶磁の近代化への歴史的課程が省略されたままいわば現代陶芸に入ったことである。もう一つは、西欧の近代美術に基づいた視覚から生じる工芸観にあると考える。したがって、筆者は以上の状況のなかで、自分の好みや感覚から朝鮮時代の陶磁器のあらゆる面を既存の先入観や美術観に頼らず、伝統陶芸を見直して、つまり伝統的な現代陶芸への造形的・技術的可能性とその作品制作について研究する。

このような考えを背景に、本稿では、韓国に潜在する造形意識や環境を理解した上で、李朝磁器から自分が感じ取った造形要素を加味し、さらに現代の多様な美的状況の中でそれを制作に生かす可能性を模索する。また、そのような論に続き、作品制作に対する自分の造形的こだわりや考え、作品制作の具体的な技術について述べる。

論文では、朝鮮時代と現在の文化的状況のつながりや変化を探りながら、来日してからくり返し接してきた李朝磁器への個人的な感想や分析にもとづき、その造形の中から現代の韓国で生かすことができると考える要素を模索する。その結果、朝鮮陶磁器の中で現代的な造形要素として注目したのは、呉須と青白磁、そして面取りやイチンなどである。

また、一連の作品制作の研究については、磁器制作における自分の考えと制作上の技術的方法、そして作品の解説を述べる。

論文は、以下のような構成になっている。

第一章「造形芸術に関する韓国の美的価値について」では、美意識とは何かという問いに対して、筆者の観点から見た韓国文化の底辺を成す美的価値について述べる。また、韓国で伝統的な陶磁器を中心とする造形物に込められたと考えられる要素、即ち思想、気質、生活などから生まれた美的価値や感性について考察した上で、その伝統的な造形感覚や好みについて述べる。

第二章「朝鮮磁器に見る造形性について」では、筆者が感じ取った、朝鮮時代の陶磁器における造形上の性質について、具体的に論じる。しかしそれは、朝鮮時代の白磁や紛青沙器の時代的な流れの追跡やその分析ではなく、来日してから反復的に接し、見直すことになった李朝磁器の多様な作例や表情などについて、その特性を探りながら私的見解を述べる。

第三章「現代韓国の美的感覚と朝鮮白磁との関わりについて」では、現代韓国の陶磁工芸を囲む美的状況の中での問題点と、それを乗り越える一つの模索として、美に関する伝統的感覚を重視しながら今日の感覚によみがえせる伝統的造形の可能性を探る。つまり、長い間に形成されて、現在の韓国にも根強く潜在していると考えられる感覚と、現代のモダンな感覚との間に生かすべき韓国的なモダニティーの陶磁造形について模索する。

第四章「作品制作における造形的要素と考えについて」では、自分の作品制作における考え

方や制作方向を具体的な造形要素あるいは制作のやり方で論じる。またそれと共に、韓国の現代陶芸によみがえる事ができると考えた伝統の制作技法やその造形的な可能性と意義を述べる。

第五章「制作の原料及び課程、そして技法」では、作品制作の研究に使用された原料や技法などの扱い方と独特の技術的な面を具体的に述べる。また、原料や制作課程のコツに関するデータ（レシピ）を明らかにする。

「結び」では、この考察によって、自分が受け止めた新しい認識や、今後の作品制作に向けての考えをまとめる。